

自然との共生、人間の共同

梅原達治

変わった書名が目を惹いたのであろうか。その本を手にして読み始め興奮に胸がときめいた時のことは記憶に残っている。A5版 92ページの小冊子に愛着を感じ、その後も机を離れることはなかった。「最後の一人の生存権」は牧野英一が1914年、札幌で行った家庭学校の記念講演会の原稿を修補したものだという。

理科の生徒であった私の理解が表層的であり、感想が的はずれであったであろうが、この法学者が語る歴史の流れや社会の状況、さらに時代の新思想に即して説くその理想など、すべてが新鮮であった。そして、大学ではこのような講義が行われているのかと思ったとき、大学生になることを漫然と憧れていた私に、大学そのものへの憧憬が加わった。

家庭学校は留岡幸助が1899年、東京巢鴨に開設した男子教護院である。留岡校長はラスキンの研究者であり、その「人と自然と共にあれば、人も幸福であり、自然もうるわしい」との思想の実践の場として社名淵(現、北海道紋別郡遠軽町留岡)を選び、同校の農場として分校を開設した。著者は講演にさきだち、北見の農園を視察し、その経営の実態に触れている。そこには礼拝堂があり、その精神的支柱となっていた。書名の『最後の一人の生存権』はラスキンの『この後の者にも』、さらに聖書の「このあとの人にも、あなたと同じ賃金を与えようと思っている」(マテオ 20.14)に因んだものである。家庭学校に集まった生徒は「後の者」であっても、「人間たるに価する生活」は保障しなければならず、そのための教育をほどこす場として家庭学校は開設されたのである。この本は、北海道開拓の精神的側面についても目を開かせてくれた。

著者はここで自由平等の原理を謳った資本主義



に続く文化には、生存競争の敗北者である最後の者といえども「人間たるに価する生活だけは保障されなければならない」という。生存競争の文化的意義を認めながらも、「それが人生における唯一の事実でもなければ、それだけでは大きな文化的意義を全うし得るわけのものでもない」とし「生存共同」という自然界の大事実を認識するように説いている。「生き残り」という言葉が横行する今日、特に自由競争と共同について取り上げたが、その他この80年前の演説は、今日の世界を眺めるのに示唆に富んだ言葉がちりばめられている。今もって、私にとって貴重な一冊である。(教養部教授)

牧野英一(1878-1970) 岐阜県生まれ、教育刑論の刑法学体系を樹立した法学者。新憲法審議や民法改正に関与した。

著書：『日本刑法』、『刑法研究』など。

留岡幸助(1864-1, 934) 岡山県生まれ、牧師、少年感化事業の先駆者、空知集治、教諭師、米国留学、家庭学校創立、少年感化救済に尽力。

著書：『留岡幸助著作集』、『留岡幸助日記』

伝記：高瀬善夫著『一路白頭ニ到ル』—留岡幸助の生涯—

John, Ruskin(1819-1900) ロンドン生まれ、美術評論家、社会思想家、ロマン主義経済学をとなえ、人間精神の改造による社会改良を説いた。

著書：『Unto this Last』, 1862 (西本正美訳：『この後の者にも』)

『近代画家論』

標題・表紙のこと

標題の「ホルム(ХОЛМ)」はロシア語で丘の意。地名(西岡)に因んでいます。図案文字も、丘をイメージしています。

表紙の写真は、砂澤ビッキ(1931-1989)の彫刻「TENTACLE(迷宮)」1983年の写真で、今号も『砂澤ビッキ作品集』1989年 用美社刊から涼子夫人および発行者のご好意により転載させていただきました。

TENTACLE(テンタクル)とは、動物の触手(腔腸動物な

どの口辺にある細長い感覚器官)を意味する英語ですが、作者はあるインタビューの中で次のように解説しています。

「……現代は視覚が中心だが、退化した触覚の中から、もっと根源的な人間というものをつかめないか、ということからTENTACLEに入ってね。見るのではなく触れ回る彫刻。つまり、真っ暗の中で『手すり』の彫刻にふれて会場に入り、そして出てくる。迷宮という意味だよ。」(朝日新聞北海道版1988.8.28.ほっかいどう文化「あーとサロン」)